

村上春樹 「猫を棄てる - 父親について語る時 -」 : 臨床心理学的一考察

| | |
|-----|---|
| 著者 | 藪添 隆一 |
| 雑誌名 | 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要 |
| 号 | 58 |
| ページ | 143-157 |
| 発行年 | 2020-12-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1108/00001019/ |

村上春樹 「猫を棄てる—父親について語るとき—」¹⁾

—臨床心理学的—考察—

藪 添 隆 一

第1章 棄てられる

昭和30年代初頭の兵庫県西宮市夙川。小学低学年の「僕」は、父の自転車の後ろに乗って浜辺に猫を棄ててに行った。猫を入れた箱を置いて、約2キロの距離をまっすぐに家に帰って来た。ところが玄関の戸を開けると、さっき棄てて来たはずのその雌猫が「にゃあ」と言っ「尻尾を立てて愛想よく僕らを出迎えた」のだった。

あまりのことに「二人で言葉を失っていた」のだったが、「僕」はそのときの父の表情を見逃さなかった。「そのときの父の呆然とした顔をまだよく覚えている。でもその呆然とした顔は、やがて感心した表情に変わり、そして最後にはいくらかほっとしたような顔になった」のだった。

すぐれた感受性は父親の表情の変化を見てとり、70歳の今日まで記憶する。父は「棄てられた子」だった。父の父（祖父）も「棄てられた子」だった。幼年期に直感した記憶は、父と息子の関係の本質をすでにとらえているのだ。

筆者は村上春樹とほぼ同年代（1950年生）で、夙川とは大阪湾を挟んで対岸に位置する堺市浜寺に育った。同時代の関西の住宅地（戦前の別荘地）の空気は覚えている。猫はもちろんのこと、犬の放し飼いが多い時代だった。ペットという概念がまだ大衆のものとなっていなかった頃で、家畜専門獣医はいても、いわゆる犬猫病院はほとんど見かけない時代だった。犬猫に「わざわざ避妊手術を受けさせるなんて誰も思いつかないような時代」だった。それだけに、保健所の野犬対策が急がれていたのだろう。野犬を捕獲する車がときどきやって来て、何人もの男たちと犬の大捕り物劇を見物したこともある。私たち子どもは捕獲係を「犬とり」と呼んでいた。だから、村上春樹の父が猫を棄てようとしたのは、猫嫌いだったからではなく、猫好きで雌猫の多産に困ったからだろう。保健所に猫の処

分を託すことに忍びなかったのだ。

一人っ子で猫達を兄弟のようにして育てていた自分がなぜ猫を棄ててに行く父に協力していたのか、このことも今から思えば不思議なことの一つだと村上は書いている。しかし、従順で素直な一人息子は父親の行動のもとになる事情は共有できていて協力したのではないだろうか。猫棄てが罪なこととして、二人で胸を痛めながら。

村上の祖父は京都の寺院住職だった。父は長男であったが高校の国語教師で、父の弟が住職を継いでいる。しかし、父は幼い頃によその寺に養子に出されたことがあった。そのことについて父は息子に語ったことはなかった。春樹は従兄弟から聞いて知っている。猫が家に戻っていたことに安堵の表情を浮かべた父の表情を「ふと、思い出してしまう」のは、父が養子先から実家に戻った時の安堵のよみがえりだったのではないかと、イメージを重ねるからだ。

父の父、祖父も幼少期によその寺に修行のためと養子に出されている。兄弟の多い貧しい家の口減らしでもあったという。そんなとき、幼い子どもの心には「親から棄てられた」傷が残る。その傷は意識的に認めがたい。生みの親を恨みたくないからだ。親のおかげで自分の今日があると思うべきだから。そう意識していて親になって、子を棄てる。棄てる意識は無く、子を棄てることを引き継ぐ。こうして父は猫を棄てようとした。天才的的感受性を持った息子は何を感じたか。「かわいそうだからやめよう」と父に逆らわず、猫を棄てる猫の親になってしまった。それは春樹自身も何らかの意味で「棄てられた子」であったからかもしれない。このとき、奇跡が起きた。猫が2キロの家路を自転車よりも先に移動していたのだった。それはもう宮崎駿の「となりのトトロ」²⁾の「猫バス」なみのファンタジーである。現実の物理的条件を突き抜ける「想い」のかたまりである。そういえば同じ宮崎駿のファンタジー「崖の上のポニョ」³⁾のポニョは、まさしく「想

いのかたまり」だ。海底の異世界、父親は奇人フジモト、世棄て（棄てられ）人である。海の太母とフジモトの間に生まれた金魚姫ポニョが崖の上の宗介への想いだけで嵐を引き連れ、津波に乗って移動する。

「僕にはそういう体験はない。僕はごく当たり前の家庭の一人っ子として、比較的大事に育てられた。だから親に「棄てられる」という一時的な体験がどのような心の傷を子供にもたらすものなのか、具体的に感情的に理解することはできない」「しかし、その種の記憶はおそらく目に見えぬ傷痕となって、その深さや形状を変えながらも死ぬまでつきまとうのではないだろうか？」

たしかに現実の人生において彼は「棄てられる」ことはなかっただろう。しかし、棄てられ、必死でかけ戻り、飼い主を何事も無かったように出迎えて見せる「猫のたましいの技」を身につけているのではないだろうか。

「棄てられる」というモチーフを追求し続けた映画監督フランソワ・トリュフォー（仏）の幼少期における「棄てられ体験」を実際に体験した作家の例として村上は挙げている。しかし、実際体験の有無は別として、村上春樹作品も「棄てられる」モチーフを追求しているのだ。

「海辺のカフカ」⁴⁾の主人公カフカ少年は15歳で家出し、ハイウェイバスで高松に来た。高松で彼が知り合う人たちも不思議な過去の影をもつ孤独な存在だった。カフカは幼少期に母と生別している。母の面影は思い出せない。母は姉を連れて家出したのだ。姉は彼の生まれる前に養女としてもらわれてきた子である。母親は血の繋がっていない姉を選び、彼は棄てられたのだった。父親は彼の家出の直前に何者かに殺害されている。カフカには時々意識を喪失する発作の持病があり、記憶が失われる。家出した少年の父が他殺体となっているわけだから、当然彼は被疑者となっているだろう。彼には覚えが無いと同時に自信も無い。

物語の中で、カフカの父と重なるイメージとしてジョニウオーカーなる悪魔紳士が登場する。猫を採集、惨殺し、たましいを溜め込んでいるのだ。カフカの母は悪から逃げたのではなかったか。カフカが棄てられたのは顔が父親に似ていたからではなかったか。さらに、カフカ少年は、父を殺し、母と姉の二人と交わる呪いを父にかけられているのだった。

「孤独は悪魔に門戸を開く」と言う。棄てられた存在。愛から見放された人には「魔がさす」のだ。なぜか？

人は赤ん坊の時、おっぱいを飲んでいいる時には「善い乳房」、お腹を空かせているのににおっぱいが来ない時には「悪い乳房」が幻として視えるという。赤ん坊が真っ赤に怒って泣き叫んでいるのは、悪い乳房（悪）と闘っているのだとピオン⁵⁾は言った。見棄てられた赤ん坊には悪魔が見えるのだ。「海辺のカフカ」は父殺し、母息子相姦イメージがメタファーとして描かれる「棄て子の物語」なのである。

「一度だけ父は僕に打ち明けるように、自分の属していた部隊が、捕虜にした中国兵を処刑したことがあると語った」「父はそのときの処刑の様子を淡々と語った。中国兵は、自分が殺されるとわかっていても、騒ぎもせず、恐がりもせず、ただじっと目を閉じて静かにそこに座っていた。そして斬首された。実に見上げた態度だった、と父は言った」。

父親が属した部隊が南京攻略部隊でなかったことを確認するまで、村上は調査するのが遅れるほど気が進まなかったと書いている。無抵抗の捕虜を「処刑」することで兵隊の度胸を強化することを奨励したという史実があったことも調べ、父が実際に処刑を実行してはいないか気にしている。また、毎朝、仏壇ならぬガラスケースに収めた菩薩に向かって父がお経を唱えているのが遠い記憶に残っている。「誰のためにお経を唱えているのか」と尋ねる息子に「戦争で死んでいった人たちのためだと。そこで亡くなった仲間の兵隊や、当時は敵であった中国人たちのためだと」父は言った。「僕はそれ以上の質問をしなかった」「僕は尋ねなかった。おそらく僕自身の中に、そうすることを阻む何かがあったのだろう」。

聞けば教えてもらえるかもしれないが、父が言う気もしないことは言わないだろうし、言わせてしまっただけの恐ろしい経験が戦争という、伺いしれない悪の影が父親の過去を覆っているとの直感が働いている。

猫のファンタスティックな帰巢譚に始まった「父親について語る時」は、子猫の昇天イメージで終わる。

同じく子ども時代のこと。とてもきれいな毛並みの白い子猫を飼っていた。「僕が縁側に座っていると、僕の目の前でその猫はするすると松の木を登っていった」その木は、とても立派な松の木で高い梢が枝に隠

れて見えないほどだった。やがて子猫の助けを求める情けない鳴き声が聞こえ始める。高みに気がついた猫が、怖くて降りることができないのだ。父を呼んだが、梯子も届かない高みから鳴き声が聞こえるばかりでどうすることもできない。猫が泣き続けるまま夜の闇に覆われてしまう。翌朝、「鳴き声は聞こえなくなっていた」「そこにはただ沈黙があるだけだった」。それから子猫は姿を見せず、次のようなイメージが残る。

「その枝に小さな爪を立て、必死にしがみついたまま、死んでひからびてしまった小さな白い子猫」。「降りることは、上がることよりずっとむずかしい」と、幼い僕に子猫の訓戒が残る。「父を語るとき」の締めくくりにエピソードとしてこれは何を意味しているのか。

子猫は棄てられたわけではない。手の届かせようのない高みにするすると自慢げに登っていく能力が災いして、孤立無援となったのである。降りることができないまま、死んでミイラとなってセミの抜け殻のように木にへばりついたままのイメージが残るのである。

村上春樹は父親の期待に応えることができずにいわゆる高学力、高学歴ができず、父親を失望させたと述べる。作家デビューは父を喜ばせ、自分もうれしかった。しかし、その後、海外で活動し、ますます活躍するとともに父親との関係が疎遠となってしまった。高齢の父が亡くなる直前に親子の絆がかるうじて回復できたとも述べている。

父親の望む学力を得ようとしなかったことへの自責の念を述べているが、最後の子猫のエピソードは、また別のメッセージを含んでいるようである。

高みに昇りつめた子としては、届きようのない父の手を求め、恨むばかりである。自力で降りることしか助かる方法はなく、その可能性は無いだろう。その孤独と絶望は、やはり見棄てられた感覚として癒えることがない。

この子猫のエピソードは「スプートニクの恋人」⁶⁾にも描かれている。

「猫は枝にしがみついて、声も出せないくらい怯えているんだと思った。だから学校から帰ってくると、縁側に座って松の木を見上げ、ときどき名前を呼んだ。でも、返事はなかった。一週間ほどたって、わたしもあきらめた。わたしはその子猫をかわいがっていたから、それはすごく悲しい出来事だった。わたしは松の

木を見るたびに、高い枝にしがみついたまま、固くなって死んでいる可哀想な子猫のことを想像した。子猫はどこにも行けないまま、そこで飢えてひからびて死んでいったのよ」

「煙のように消えてしまった」子猫のイメージは「高い木の枝にしがみついたまま」永久にそこに在る。「スプートニクの恋人」の1頁目は次の記事ではじまる。

「スプートニク」

1957年10月4日、ソヴィエト連邦はカザフ共和国にあるバイコヌール宇宙基地から世界初の人工衛星スプートニク号を打ち上げた。直径58センチ、重さ83.6kg、地球を96分12秒で一周した。翌月3日にはライカ犬を乗せたスプートニク2号の打ち上げに成功。宇宙空間に出た最初の生物となるが、衛星は回収されず、宇宙における生物研究の犠牲となった。（「クロニク世界全史」講談社）

消えた子猫の飼い主すみれはライカ犬にも思いをつないでいる。

「すみれはそれ以来ミュウのことを心の中で「スプートニクの恋人」と呼ぶようになった。すみれはそのことばの響きを愛した。それは彼女にライカ犬を思い出させた。宇宙の闇を音もなく横切っている人工衛星。小さな窓からのぞいている犬の一對の艶やかな黒い瞳。その無辺の宇宙的孤独の中に、犬はいったいなにを見ていたのだろうか？」

永久の不在となった対象を想い続けることを服喪と言う。

村上春樹にとって、孤独な存在が服喪の想いを繋ぐ物語を語り続ける意味は、自分を棄てた飼い主の家に向かって全ての想いを繋ぎ続けることなのかもしれない。

第2章 暗闇

浜辺に捨てて来たはずの猫は先に帰っていた。自転車よりも速く。物理的時空を超えて、猫の移動は暗黒の地下道を疾走しているイメージが浮かぶ。

オウム真理教が起こした地下鉄サリン事件の被害者インタビューから描き出したノンフィクション「アンダーグラウンド」⁷⁾。「夜の街」の暗部と悪を描いた「ア

フターダーク」⁸⁾。空井戸の底で異次元世界に「壁抜け」を試みる「ねじまき鳥クロニクル」⁹⁾。漆黒の暗闇に「羊博士」を訪ね、親友「ねずみ」の亡霊との別れを経験する「羊をめぐる冒険」¹⁰⁾ 前掲書「海辺のカフカ」では、真っ暗な夜の森林に分け入り、カフカ少年は悪魔と対峙する。

非行生徒 A の指導上の相談面接で、高校教師（女性・20代）と筆者の次のような会話を思い出す。¹¹⁾

教師「質問していいですか？」

筆者<どうぞ>

「変な質問なんですけど・・・A はなぜ夜に活躍するのでしょうか。昼は割におとなしくしているのに、夜になると家から出て行って朝までウロウロするのです」
<暗闇の中になにかがある There is something in the darkness. という言葉を芥川龍之介が『羅生門』¹²⁾ の創作ノートにメモしています。羅生門は読まれたことは？>

「あります。私は国語の教師です」

<ギリギリスみたいな青年を大人の男に変身させたのは羅生門の暗闇なのです。あの小説の主人公は暗闇です>

「大きな円柱に」ギリギリスが『一匹とまっている』だけの寂しい羅生門の夕暮れ。ある男が腹を減らし、心細さに震えている場面から物語りは始まる。ギリギリスが象徴的に示す、青ざめた、心細い、不安な青年の孤独。青年は羅生門の暗闇に入っていく。

暗闇の中に居たのは、捨てられた死人の遺体から盗みを働いている老婆だった。明日の糧のあてもない不安の中で「盗人になるか、死ぬか」迷っていた青年は、盗みの現場に遭遇し、いつのまにか不安は消えて無くなる。死臭を嗅いで感じていた吐き気も忘れてしまう。その代わりに悪に対する怒りとともに「勇気」が出たのだ。非力な老婆に何をしているのかと詰問する。女の屍の頭髪を猿のノミ取りのようにさわっている理由を問いただす。抜いた髪の毛で鬘をつくるのだと老婆は答えた。自分が今、髪を抜いた屍体の女は、生前は死んだ蛇を魚の干物だと偽り商売していた悪いやつで、こうされても自業自得なのだと言う。自分は、この女のした事が悪いとは思ってはいない。しなければ餓死をするのだから、仕方がなくした事だろう。「されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思

わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである」。

これを聞いているうちに、青年の心には、「ある勇気」が生まれて来た。「それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさっきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である」

悪に対する怒りの方向性「善」とは反対の方向性の「勇気」である。「悪の勇気」が男にわいたのだ。

「きっと、そうか」「老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面砲（にきび）から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云った」「では、己が引剥をしようと思わまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」と青年は「すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。男は「またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪を倒（さかさま）にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。下人の行方は、誰も知らない」

暗闇の中にある「なにか」とは、「悪」である。私たちが人生の最初の時期において出会う悪が、来てくれない「善いおっばい」の代わりに立ち現れる「悪いおっばい」であると、ビオンにならって考えてみれば、赤ん坊として泣き叫びながら怒りを放出する自分が見えて来はしないか。怒ればどうなるか？「うつ」「落ち込み」は消えて無くなる。「不安」「怖れ」も怒りの噴出とともに飛び散っていく。醜悪な姿と行為を成す老婆が暗闇に浮かび上がった最初の光景で、ギリギリスの青年は「悪いおっばい」への怒りを噴出させた。そして、怖れや不安は「勇気」に変換したのだ。しかし、この「最初の勇気」だけでは生きては行けない。「悪いおっばい」の化身「悪」を憎み、怒るだけの勇気で

あるからだ。赤子の勇気と浄化（カタルシス）だけでは成長できないのだ。

しかし、「怒りは新たな地平を開く」¹³⁾のである。ひ弱なキリギリスの怒りは、「新たな地平」を開いたのだ。それは、盗人の論理「命のための盗みは悪くはない」である。盗むことの正当化であり、この論理に生きることは、「悪として生きる」ことになる。つまり、悪に対する善なる者としての怒りから、悪人としての怒りが生じたのだ。

子どもは思春期になると大人に悪を観る。身近な親を疑うことなく善と信じてきた子供は、親に悪を見出し、怒る。しかし、親に悪を見出すと同時に自分自身の悪が見えてくるのだ。その自己嫌悪は親に投影されることがもっぱらで、いきおい親批判の感情は募るのである。

親批判は世間批判へ拡大する。世間は世界へと更に広がる。過去の歴史批判に拡大深化する。

しかし、世界批判、歴史批判も所詮「最初の怒り」「偽善的批判」の域を逃れられない。悪の内化、自己批判との混濁から生まれる外に向けての批判は、どこか子どもっぽい。

大人になってくると今までなかったところに毛が生える。子どもの時には出ていなかった体液、臭いが出るようになる。これは驚きと自己嫌悪を伴うが、同性の仲間と活動できる子らは、当たり前の人になっていく証として受け入れやすくなる。つまり、「けがれ」を受け入れるのである。「悪の受容」も「けがれの受容」であり、適度な悪の受容の結果、「大人」が誕生する。羅生門の暗闇で悪に出会った青年は、終に自己の悪を肯定し盗みを働くに至る。またたく間に梯子段を駆け下り、夜の闇に消え去る男は一人前の盗賊の姿に変身している。

第3章 孤独

高い梢にしがみついて降りることもできずに昇天していく子猫。地球に帰還できない人工衛星の窓から船外の宇宙空間を見ているライカ犬。孤独の極みの存在は何を見、何を聞くのか。

入学したばかりの中学校に登校できなくなった少年がカウンセリングルームに来た。小学6年の夏に家族

と登山に行ったときから「変になった」と少年は言った。

「山の頂上は大きな岩がゴロゴロしている草原がひろがっていました。そこで遊んでいるときツーンが起きました。それから何度も、今もときどきツーンが起きますのですが、初めてのツーンはその山の上で起きた大きなツーンです。プールで泳いでいるときなんか水が耳に入って、水が出るまで聞こえにくくなるしツーンとなるでしょ。あれに近い。でも、このツーンは耳が変になっているのではない。音や声は聞こえている。ただ、変に遠くで聞こえる感じがする。あのときも僕の様子が変わったらしく、気がついたお父さんが『だいじょうぶか』と何度も怒鳴った。目の前にお父さんの顔が覗き込んでいるのに、声も聞こえるのに、遠くから呼んでいるみたいに聞こえる。聞こえるだけでなく、遠くにいるようにお父さんが見える」

カウンセラー（筆者）<ちょうど望遠鏡をさかさまに覗くと近くの景色も遠く小さく見える>

「うん。そう！望遠鏡さかさまに見るような、とほく今、言うつもりだった」

<声も、物音も透明な壁の向こうから聞こえるみたいにな>

「そうそう！それに動くのがこわくて・・・自分の動きが変で・・・」

<自分の動きがスローモーションみたいになったり、早送りになったりする？>

「先生、なんでわかるの？わかってくれた人、はじめてや」

<ちょっと安心した？>

「ものすごく安心した」

<それはよかった>

「治る？」

<治るよ>

「・・・・・・・・」

<・・・・・・・・>数分沈黙の間、彼はカウンセリングルームの箱庭とフィギュア棚を見ている。

「あれ何ですか」

<箱庭です>

興味ありげに数歩、箱庭に近づく。

「変なこと言うけど・・・ほくね、今、3歩歩いたでしょ」

<うん>

「歩く前に3歩と頭に浮かんでから歩く」

くなるほど。3歩と浮かんだら絶対に3歩で歩かなあかん」

「そう！・・・これはツーンよりも前からの癖なんよ。3歩なら少ない数だから大丈夫やけど、家に帰ってきたときなんか、家の玄関まで253歩と出たら、253丁度に歩くのが難しい」

＜歩数が合わなかったら、やりなおす？＞

「そう！何回も元の、頭に数字が浮かんだスタート地点まで戻って、歩きなおす。これは、しんどいし、家族に見つかるのは嫌やから秘密にしている、他人に声かけられたら、立ち止まって、歩数を忘れないようにしたりして、苦労する」

＜苦労やな＞

「そう」

と黙って棚の中の人形、おもちゃ類を眺めている。

一匹のキリンの縫いぐるみを手に取る。

＜箱庭に置いてみる？＞

彼は箱庭の隅、内側の砂の上にキリンを置いた。キリンは箱の外を眺めているようだ。

＜キリンさん、何が見えますか？＞と筆者はキリンに尋ねた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」キリンは無言のままだった。

面接は次回の日時を約束したが、彼は来なかった。家から出なくなると母親が電話で言った。

キリンは、今思えばあの「ライカ犬」だった。彼は、箱庭療法で「宇宙を眺め続けているライカ犬の目」をキリンに見てしまった。彼が目の当たりにしたのは暗闇の中の孤独だった。

「なんで箱庭をやらせたのですか！」

この場面を報告した時、私はスーパーバイザーに指摘されて気がついた。彼がカウンセリングルームに二度と来なくなり、家から外に出なくなったことと、箱庭のキリンが、このときはじめて意識として結びついたので、すでに遅かった。

箱庭療法は強力な技法である。薬と同じで効果的な技法ほど、安易に使うべきでないとは知識的に知ってはいたが、本当の意味を私はわかっていなかった。スーパーバイザーは、彼がそれ以後、引きこもることを予感していた。

来談面接のキャンセル電話をかけてきた母親に、毎週の電話カウンセリングを提案した。その場で母親は本人に「電話でカウンセリングできるって」と受話器

を彼に渡し、彼と通話できたので、毎週水曜日10時から15分間の電話カウンセリングの約束ができた。

「電話は僕からかけるのですか」

＜そうです＞

「あ、そうですか」

＜はい＞

強迫症状。頭に浮かんだ数どおりの歩数で玄関に到着しなければ、何度でもやりなおす。これは彼を苦しめてきた症状であるが、「症状は治る道」でもある。強迫的な時間厳守と継続の力で、彼は以後3年間の電話カウンセリングを続けることができた。

強迫症状は「固執」(こだわり)「反復」(くりかえし)が特徴である。なぜこだわるのか？くりかえすのか？拡散、分裂、引き裂かれを防ぐためである。とても心配なことが起きると、居ても立ってもいられなくなる。動物園の檻の中のクマみたいに同じ場所を同じ歩数でくりかえし往復し続ける。とても汚らしいものごとに触れてしまう。皮が擦り剥けるほどに体を洗う。触れた箇所だけでなく全身を洗わねば気が済まない場合もあるだろう。何度も洗浄をくりかえす。悲しくて仕方がないとき、泣き叫ぶ。同じ言葉をくりかえし叫ぶ。近い愛する人を亡くしたあと、亡き人の亡くなった同じ場所を定期的周期的に訪れ、哀悼の花を生けて荘厳の儀式を行い祈ることを何度もくりかえす。

人は存在を拡散、分裂、溶解させないために、固執、反復する。「お百度参り」などの宗教的儀礼行為となっている場合もあるが、個人的な行為として無意識的に行われ、自他共に異常な行為として被害を感じる場合は、これを「症状」と呼ぶ。「怒りは地平を開く」(前掲、河合隼雄)の言葉にならって「症状は地平を開く」とも言うことができるのではないだろうか。症状は「治る道」なのだ。

彼は毎週、きっかりと数秒違えず約束の時間に電話をかけてきて、15分経過する直前に「あ、先生、時間です」と知らせてくれる。この「くりかえし」を3年間休まずに続けた。強迫的「治療構造」(枠)が「治る道」だった。存在の崩壊を防ぎ、アイデンティティの再形成を果たしたのは、離人症「ツーン」の症状さえもが退いていく(必要でなくなる)ほどの「治る道」つまり、固執と反復だったのである。

第4章 離人症状

症状が「治る道」だとすれば、「離人」という症状は、何からの「治る道」なのか？

地球に帰還できない宇宙船。宇宙空間を周回し続ける宇宙船に閉じ込められたライカ犬。クライアントの少年は今、家族以外の世間との交流から退行し、家に引きこもっている。さらに、調子が悪くなると、自分の部屋に閉じこもる。ますますライカ犬的になるのだ。しかし、引きこもる前に、彼はすでにツーンの世界に入ってしまった。

「ツーンになるとね、透明なカプセルに入ったようになる。薄い柔らかい膜でできているような、人には見えない透明な膜だから、それを感じているのは僕だけ。だから、わかってもらにくい」

その「透明な膜」は、「宇宙船」の「船体」に相当する。船体はライカ犬の自由を拘束し閉塞状況を作っていると同時に宇宙という死の世界からの「守り」なのだ。こう考えれば離人感をもたらす「透明な膜」も死の世界からの「守り」なのだ。

彼はまた、電話面接で次のようなことを言った。「あのね、『本当の世界』があるの」「本当の世界は絵天然色のアニメのような世界。とてもくっきりした絵のような、原色の世界。ふつう、そんな世界が嘘の世界と、普通はそう思うでしょ。けど、僕は逆にみんなの見ている世界が嘘で、僕に見えるアニメの世界が本当の世界とわかる」

筆者<本当の世界は、形も色もくっきりはっきりしている>

「そう。生き生きした世界。この部屋の目に入る物は確かにここにある本物。でも、今、家の外・・・たとえば表通りへ出たら、いつもの景色でないかもしれない。行って見て、この目で見てみないと本当かは、わからない。ということです」

<じゃあ、今、電話している相手である私は、本当の存在？嘘の存在？>

「本当の存在です。先生は、特別です」

<特別か。君には特別がわかる。特別とは、本物という意味でしょ>

「そのとおり！本物は、説明しなくてもわかる人です」

<なるほど。説明せなあかん人は説明してもわからんね>

「あっ、先生、時間です」

<じゃあ、また来週この時間に電話してね>

「はい」

「本当の世界」とは「真実の世界」「魂の世界」である。世俗のリアルな世界に対して、「本当の世界」はアクチュアルなのだ。

宇治の平等院は、極楽浄土という「本当の世界」である。

ゴッホの描いたアルル地方の風景、向日葵、糸杉、星月夜は「本当の世界」である。

アニメの色彩と線で塗り固められた世界が「本当の世界」だとクライアントは言う。本当の世界（魂の世界）を必要とするのはなぜか。それは、暗闇の中にある「なにか」と深く関連する問題だと思われる。

暗闇の中の「なにか」とは「悪」ばかりではない。羅生門の暗闇の中に青年を悪党に変身させた勇気は生き生きしたエロースでもあったはずである。屍累々たる暗闇に蠢いている老婆と青年は闇に浮かび上がる生命なのだ。ゴッホの「星月夜」の異様な輝きは、暗黒の夜空の闇があって初めて見ることのできる「本当の世界」なのだ。

おっばいが飲めないで泣く赤ん坊に幻覚としての「悪いおっばい」が視えているとすれば、それは悪魔の元型である。しかし、おっばい不在のさなか、悪魔と闘う赤ん坊は、やがて「美しい、善いおっばい」が必ずやって来ることを信じるができるようになっていく。さらに成長すれば、悪魔は現れなくなる。赤ん坊の怒り、闘う泣き叫びは変化変質するだろう。「おっばいが飲みたいよー」と母親に送る甘え泣きへと変化するだろう。

暗闇の中には光（善いおっばい）の可能性が生まれる。この可能性を「善」と言う。善は神仏の予感である。神が目の前に顕現する経験は、ルドルフ・オットーの宗教学大著「聖なるもの」¹⁴⁾に詳しい。

赤ん坊が何もない「不在」の暗闇に「善なる乳房」を発見したときの感動と感激を想像するに、暗黒の虚無の世界に神々しい光と出会う神の降臨場面、あるいはサンドロ・ボッティチェリ作「ヴィーナスの誕生」を重ねることができる。

「悪いおっばい」が居るのではなく、おっばいが「不在」なのだ。不在を認識し、待つことができるようになるためには、母親の定期的継続的な授乳のくりかえ

しが必要となる。授乳ばかりでなく、日々のルーチンとも言うべき育児ケアの数々と「お母さんのやさしい言葉かけ」が「待つ能力」の素としての「期待」と「情緒」を育てる。

「不在を知る能力」は「期待できる能力」に育つ。「きっとおっぱいはやって来る」との確信は「またいつものようにやって来てほしい」との希望が前提として在るはずだ。「希望」は母親の繰り返すケアと愛情に満ちた「愛情をこめたことばの語りかけ」¹⁵⁾ (松本邦裕 2011) によって培われていく。

「たとえば『かなちゃん、おいしいおっぱいを、たくさんあげましょうね』が繰り返されるなら、乳児はその何かと結びついたその乳房を、内側の“空”という場の中で認知するだろう。それは[α要素]と呼ばれる萌芽的思考である。[α要素]は、乳児にそれを考えることを求めるかもしれない。そこで続いて乳児は、母親の[α機能]を取り入れるかもしれない」と松本邦裕は「不在論」で述べ、次の注釈を付記している。

[α要素]

思考としては、[β要素]に次いで原始的なものだが、考えられる思考としてはもっとも原始的な思考である。視覚、聴覚、触覚などからの感覚素材が変形され内在化されるが、ことばにならず、意味ある音として伝達できない考えである。思考としてころのなかに蓄積され、考えられる。

第5章 リアリティとアクチュアリティ

乳児と母親の「語らい」は音楽に近い。意味よりも情緒的なコミュニケーション。二人の対話と同時に発生する独り言。「意味ある音として伝達できない考え」を母親と乳児は夢想し交流している。母子の内的な交流の世界が、クライアント少年の言う「本当の世界」なのだ。外からみれば赤ん坊と母親は内向の闇に居る。内側の二人はアクチュアルな「本当の世界」に居る。西洋絵画史に残る数々の、キリストとマリアの聖母子像も乳児期母子の内的アクチュアリティの表象だ。

木村敏著「リアリティとアクチュアリティ」¹⁶⁾に次の記述がある。

「離人症において失われるものは」「実在に関する知覚や判断ではない。対象界の実在は実在として正しく知

覚され、判断されている。ただそこに、健常人の場合には必ず伴ってくるはずの — 私的・主観的な — 『実在感』が伴っていない。この『実在感』は、多くの場合に『現実感』とも言い換えられる。そして患者の多くは、周囲の事物が『現実性』を失った、という言い方をする。事物の実在性と現実性は、日常の用語法ではほとんど区別なしに理解されている。われわれもこれまではこの二つを同義に用いてきたし、離人症に関する文献でもこれを使い分けている議論は見あたらない。しかし、これははたして同じ一つのことをさしているのだろうか」

少年がツーンになった直後も「現実性/リアリティ」は失われていない。少年の異変に気づき、声をかける父親を彼はとらえ、覚えている。ただ、ツーンで失われていたのは「実在性」だった。父親の存在（現実性）はとらえていても、父の声や姿の「実在性/アクチュアリティ」が失われていたのだった。望遠鏡を反対側からのぞいたように遠く小さく見え聞こえたのだ。

木村敏をさらに読む。

「このアクチュアルという語には「現実」の意味の他に「抜き差しならない当面の現在」というような時間的な意味も強く含まれている」。

少年の言う「ツーン」とは、実存的時間、「いま・ここ」の感覚を喪失した状態といえる。＜自分の動きがスローモーションみたいになったり、早送りになったりする？＞と尋ねた筆者の言うとおりで彼は答えた。

ところが、引きこもり状態の中で彼は実在感/アクチュアリティに満ち満ちた世界を取り戻して「本当の世界」に入った。実存的世界に入ったのだった。それは、アクチュアリティ百パーセントの「アニメの中の世界」だった。彼の引きこもっている「本当の世界」は、アクチュアリティの缶詰のようだった。「外部」のリアル百パーセントの現実世界から守られているディズニーランドのようだった。家の外の世界はリアリティに満ちていて、彼にとっては「ほんとう」が疑わしい世界である。なぜか？現実を夢をこわすからだ。ただ例外として、毎週15分間の電話面接の相手である筆者だけは「ほんもの」として実在を感じる対象であり続けた。

離人（ツーン）が発症する前から、彼は強迫（気になり/こだわり）症だった。外から帰って来て家が見

えるところまで来ると、脳裏に数字が浮かぶ。そこから家の玄関の敷居をまたぐまでの歩数である。その歩数どおりに玄関に到達できるまで、ちょうどお百度祈願を踏むように、何度もやり直すのだ。なぜか？数字/リアリティ以外の実在性/アクチュアリーが信じられないからである。では、なぜ信じられないのか？ピオンの言う「 α 要素」が欠乏した状態だから、と筆者は考える。

乳児のいのち「おっばい」が「悪いおっばい」で飲めない。「善いおっばい」だから飲めると、二つに一つの思考。「どっちのおっばいか？」の二者択一問題は原始的思考（ β 思考）である。 β 思考は、「黒か白か」の単純極まりない即物的思考である。 β 思考レベルの乳児に「お母さんのやさしい言葉かけ」が授乳とともに繰り返され、母子一体感のなかに醸造熟成され、 α 要素が発酵し、 α 思考が乳児に思考されるに至る。

それにしても、 α 思考とは、長じて情緒的な、悩ましさを含む「粘りある思考」であり、それは「愛」「恋」の要素でもある。

つれづれの長雨にまさる涙川（伊勢物語）

いたづらに我身世にふるながめせしまに（古今和集）
降り続く雨と恋の眼差しを恋人の面影に向け続ける「ながめ/眺め・長雨」の掛詞。この文学的情緒にも α 要素/思考は「いのち」である。あれかこれか、結論を迫る β 思考では文学どころか恋もできない。情緒が無いのである。

あの「羅生門」の老婆も青年も、暗闇のなかでの盗みと格闘の最中でさえ、自己の盗みの正当性を述べ立てているのは、彼らが問答無用の悪人、 β 思考人間以上に発達した α 思考人間、血も涙もある人情の持ち主たちであるからだ。

続けて木村敏を読む。

「アクチュアリティがまだアクチュアリティとして実現されていない状態、それが『潜在性』virtualityである。ヴァーチュアリティとは、なんらかの『効力』virtueあるいは『力』を備えていながら、まだそれを展開していない状態を指している」。

先述の「母子一体感のなかに醸造熟成され、 α 要素が発酵し、 α 思考が乳児に思考されるに至る」の「醸造熟成」「発酵」は味噌、醤油、うどん、ソバなどの製造に欠かせない製造過程である。職人はこれを「寝かせる」という。じっくりと手間ひまかけて、もとも

と要素として潜在する効力を醸し出す製法は、人の心の素、人情的思考にも必要なのだ。そういえば、よく寝かせて発酵した味噌、醤油は、その味も「まったり」している。単純・鋭敏な「くっきり」「さっぱり」と一味違う。うどん、ソバも、よく「練れた」「打たれた」ことにより、「腰がある」のだ。適度な粘りとまったりとしたおだやかさと味わいの「人柄」は、単純な β 思考優勢人間には見受けることはできない。客観/合理の、いわゆるリアリティ人間には無理な知的レベルがある。これは乳幼児期からの熟成と成長過程の人格形成（練成）による、 α 要素の発揮が成された場合に見られる「自己実現」の境地かもしれない。

木村敏をさらに読む。木村が事例として採り上げている離人症患者（女性）は「もし自分の心を一点に集中できなくなったら、大変なことになるだろう」という考えが頭をかすめた瞬間に、中心点を失ってばらばらになり、「自分というものがなくなってしまった」と言う。

「本来ヴァーチャルなものである自己を — アクチュアライズするのではなく — 客観化してリアライズしようとする無謀な試み、それが『自分の心を一点に集中』しようとする彼女の努力だった。『生成に存在の刻印を押そうとする』人間の『持病』は、それがもし完全に成功したなら、離人症という結果を生むのではないか」

ここまで読み、少年が家の玄関までの歩数どおりに何度もやり直す強迫の意味がわかる。彼も「生成に存在の刻印を押そうとする」「人間の持病」を極端に発症していたのだ。

「心を一点に集中する」ことの実現は、どだい無理なのである。心はもともと一つに定まり難く流動的であるからだ。本来的にヴァーチャルな自己とは、赤ん坊の時から持っている「生きる力」である。心は生きているから常に動きまわっているのだ。自己を固定しようとはせずに、意味のある動きとなるようにアクチュアライズする。その自覚と力の発揮によって現実を自己の人生に組み込むのだ。これを木村敏は「自己実現」と言う。

「お母さんのやさしい言葉かけ」に感応して引き出された可能性（ヴァーチャリティ）がアクチュアリティであり、それが魂によってとらえられた実在感なのだ。あくまで快感原則に支えられた現実原則の把握でもあ

る。「美しい花がある。花の美しさなどというものはない¹⁷⁾」との小林秀雄の名言があるが、果たしてそうだろうか。「花の美しさ」は潜在的に α 要素として私たちの中にあるのではないか。あるからこそ、ヴァーチャリティの力で花を美しく感じる事ができる。ゴッホ「ひまわり」のアクチュアリティは「花の美しさ」であり、「美しい花」ではない。

ビオンによれば「 α 思考」は「物語・神話思考」に発達する。時間の流れの感覚が、出来事の推移を物語化する。時間の流れの感覚が、出来事の推移を物語ることを、あるいはドラマの展開のような夢見をすることができるようになっていく。私たちは寝ては夢で、起きては「物思い」で、なにやら思考し続けている。人間は寝ても覚めても考え続けている。夢見心地の状態が恋心の動きによってアクチュアルに「物語・神話思考」されると先述の「ながめ」となる。

ところが、ほんやりとした物語の空想を否定し、自己の意識を統一し固定できなければならぬと錯覚すれば、木村敏事例の女性患者のような離人症の発症となる。

これは個人の思想の問題ではないだろう。乳児期からの資質、さらに母親以前から引き継がれた資質による β 思考優勢の性質傾向に由来する。

第6章 さびしさの芽生え

キリンの孤独を観たときに少年が感じた孤独は強烈だったに違いない。しかし、強迫的に「お百度」を踏んで帰宅に苦労していた状態からは劇的に「治る道」へと踏み出した瞬間だった。真に孤独な存在は孤独を感じることができていないのだ。長時間の正座でシビレきった足はつねっても無感覚なように。儀式のように浮かんだ数字どおりの歩みを追求している症状は、まだ「守りの道」だった。ツーン体験によって離人状態（実在感/アクチュアリティの喪失）に陥り、箱庭のキリンで自己の孤独を観たのだった。自室にこもり、彼はディズニーランドのようなアクチュアリティ充溢の2年間を過ごす。毎週1回、15分間の電話カウンセリングは家の外の「ほんとうにあるかどうかわからない世界/リアリティの世界」との通信だった。電話の対象はカウンセラー（筆者）だったが、彼はアクチュアルな世界「本当の世界」の報告をし続けた。やがて

3年生となろうとする頃に、彼はディズニーランドに疲れて来たのか、飽きてきたのか、「言葉では言い表せない」「つまらなさ」を訴えることが多くなった。いわゆるアンニュイ、「ながめ」の気分だと思う。「先生、『本当の世界』と、そうでない世界と、区別がつかなくなってきた」

<ディズニーランドで、夜のパレードが終わって、帰る時間になったとき・・・そんな感じがしませんか？>

「あっ！ぴったり、それです。それです。もうおしまい、皆さん気をつけてお帰りください・・・帰らないで、このままディズニーに居たい人はディズニーホテルで泊まってください。と言われても・・・やっぱりなあ」
<やっぱりねー>

「うん。そんな感じが、このごろずっとする。もうすぐ3年生やし。あっ、僕、中学生やったとか、それは前から知っているけど、うそみたいな感じやった」

<家の外の世界がうその世界でなくなってきたのか？>

「その分、部屋の中の『ほんとう』も減ってきた(笑う)」

<(笑う)・・・>

「この変な気持ちは何？」

<さびしさ>

「あっ・・・(5分沈黙)・・・さびしい」

<治るのはさびしいな>

「さびしい(泣く)」

以後、少年は父親の運転する車で夜の外出を試みる。本やCDを買いに出かけて、車から一人で店に入って買い物もできるようになった。電話カウンセリングで「ほんとうの世界」の話は出なくなった。ツーンも起きなくなった。電話カウンセリングでの会話が普通の日常会話になった。つまり、話題が現実的となり、普通の雑談とリラックスした沈黙で「あ、先生、時間です」で終わることの繰り返しとなった。驚いたことに、電話の途中で「お母さんが僕の進路のことで相談したいそうなので代わります」と母親を電話に出させることも生じたのだった。

どうやら現実的な「進学」について、中学校担任とも話し合えたようだった。ツーンの消えた彼は、3年生の秋には、「ただの登校拒否」(本人の言葉)になっていた。

あれから30年が経過した。3年生の春の電話カウンセリングで「さみしい」と泣いた時からの面接内容を筆者はほとんど覚えていない。中学1年生春、「孤独」を箱庭のキリンに観た時から引きこもりと同時に電話カウンセリングが始まり、3年生の夏「治るさびしさ」に泣いた時点で、彼は治っていた。3年生秋・冬は「ただの登校拒否」つまり、現実/リアル世界にも夢/アクチュアルを観ること。自己実現/ヴァーチャルに生きる準備にとりかかっていた時期だった。

筆者の記憶に残る本事例の最後の出会い場面がある。少年が予告電話のとおり、面会に一人でやって来たのだった。

「お久しぶりです。今日は通信制高校の入学式です。これから行って来ます」

<よかったなあー。おめでとう>

「はい、ありがとうございました。先生もお元気で」

これだけの言葉を交わして、手を振って廊下を去って行った。

スプートニクのライカ犬が地球に帰還したような信じられないファンタジーとして筆者は時々この場面を思い出している。

第7章 幸運の要素

「猫を捨てる」は、捨てて来たはずの猫が家に戻って来ていた話である。リアルな現実的理解を超えて、猫は孤独な闇の中を疾走し、捨てた父子の自転車よりも速く帰宅していたのか。猫に出迎えられた時の父の「その呆然とした顔は、やがて感心した表情に変わり、そして最後にはいくらかほっとしたような顔になった」と村上春樹は書いているが、父が同じ表情をした場面を別の思い出話に書いている。¹⁸⁾それは、9歳の秋、セントルイス・カーディナルスが来日、全日本チームとの親善野球試合があった。父と観に行った甲子園球場での出来事。試合開始前に大リーガーたちが球場を一周、観衆にサイン入り軟式テニスボールを投げ入れるサービスがあった。

「人々は立ち上がり、歓声を上げて、そのボールをとろうとした。僕はシートに座ったまま、ぼんやりとその光景を眺めていた。どうせサイン・ボールなんて小さな僕にとれるわけがない。でも次の瞬間、気がつくと、そのボールは僕の膝の上に載っていた。たまたま

それが僕の膝の上に落ちたのだ。ほんとと、まるで天啓か何かのように。」『よかったなあ』と父親は僕に言った。半ばあきれたみたいに、半ば感服したみたいに。そういえば、僕が小説家としてデビューしたとき、父親はだいたい同じことを口にした。半ばあきれたみたいに、半ば感服したみたいに」

この出来事を「少年時代の僕の身に起こった、おそらくは最も輝かしい出来事のひとつ」と村上春樹は書いている。その大事な要素は彼の幸運と成功を、猫の奇跡的帰還の時と同じ表情で「半ばあきれたみたいに、半ば感服したみたいに」「よかったなあ」と讃える父親の「 α 要素」ではないかと思う。

ビオンの「 α 要素」は夢・物語思考の素だ。授乳している母親のことばかけに始まる情緒的二者関係とコミュニケーションで発酵・醸造される情緒の素だ。息子の幸運・成功にどう反応するかは、父親の真価を問われる瞬間である。そんな瞬間に、たとえば、「せっかく手に入ったんだから、失くさないようにしろ」と忠告する父親もいるだろう。「このサインボールは値打ちが出るぞ」と説明する父親もいるだろう。とにかく「評価的・説明的」な表現と反応は、「 β 要素」を含むのである。百害あって一利なしの言い草なのである。

「となりのトトロ」のメイがトトロと初めて出会い、その後眠ってしまったまま森の外れの草むらで姉サツキに発見され、トトロと会った場所に父と姉を案内する。しかし、獣道(けものみち)の中を探しに行っても元の場所に帰って来てしまう。父と姉は大笑い。「うそじゃないもん!」と怒るメイに父はこう言った。「お父さんも姉ちゃんもメイがうそつきだなんて思っていないよ。それはきっと森の主なんだ。運がよかったね」。 α 要素機能は物語思考の素である。「運がよかったね」と娘に言ってやれる父親は娘の幸運の素を与えることのできる父親である。トトロたち「もののけ」が、幸運をもたらす物語がそこから展開する。

「運」は非科学的非現実的な概念と言える。「運がよかったね」とメイに言った父は、その場面の後、娘二人を塚森(鎮守の森)に連れて行き、しめ縄を張った楠の大木に「メイがお世話になりました。これからもよろしく願いいたします」とあいさつする。彼は大学に勤める考古学者なのだ。古来、日本人の宗教性は大自然への畏敬とあいさつに収斂することを体現して

いる。作者宮崎駿の見識と宗教性が生んだ人物である。

「運」を非科学的と評する傾向は現代日本において強い。 β /リアル機能、の偏重傾向である。「心理学」は「脳科学」に人気を奪われて久しい。「心」はヴァーチャルで創造的な実在性を創り出すのに、リアルな「脳」の方が現代人には「科学的」に思えるのだ。

父親の α 機能は、村上春樹の物語（人生も含んだ）の素となっている。信じられない物語として、闇の中に悪魔と対峙しながらも魂に導かれ現実の世界に帰還する内的経験を世界中の読者に提供し続けている作家の「心の故郷」は彼の父親かもしれない。ツーンからの帰還を筆者が喜びくよかったなあ>と半ばあきれたように感心する思い出が重なるのである。

筆者にすすめられて少年はキリンを一匹、箱庭に置いた。キリンの姿に自分の孤独を覗てしまった。「箱庭をさせられる」は「捨てられる」に重なるのである。「キリンを選び箱庭に置く」ことが「自分を説明すること」となるからだ。「説明される自分」はどうしようもない「客体」となる。自分から離れた、棄てられた自分となる。村上春樹の父が、そのまた父（祖父）に「僧侶の修行に出される」ことも、この「客体化」なのだ。春樹の父は2度に渡って出征している。これも意味「捨てられ経験」である。ところが運良く彼は生き延びて復員した。それは彼に与えられた「 α 要素」と「物語思考」のおかげだった。

これをもたらした第一の要素は、「猫を棄てる」には描かれていないけれども、彼の「母親のやさしいことばがけ」だろう。息子に「よかったなあ」と半ばあきれながら感心してやれる「 α 要素」は、乳児期の授乳のことばがけによって母親から伝授されるからである。

第二の要素は「仏教と俳句」ではないだろうか。 α 要素が発酵・醸造されるイメージは先述のとおりである。春樹の父は「西山専門学校」で仏教を学び俳句に「はまったよう」である。在学中に徴兵され、戦地から西山専門学校の俳句雑誌に寄稿した二句。

鳥渡るあああの先に故国（くに）がある

兵にして僧なり月に合掌す

春樹はこれらの俳句を挙げて次のように述べる。「そこ（軍隊・戦地）には精神の大きな混乱があり、動揺があり、魂の激しい葛藤があったに違いない。そんな中で、父はただ俳句を静かに詠むことに慰めを見

出していたようだ」「父はその後も長いあいだ俳句を詠み続けていた」。

兵役を終えて西山専門学校復学後卒業。その後再び臨時招集を受け京都第五十三師団に配属となる。幸運にも、わずか二ヶ月後に招集解除になる。数年後、京都帝国大学文学部に入学する。招集解除がなぜなされたのか、今は不明である。「実に真珠湾奇襲攻撃の八日前のことである。もし、開戦に至ったあとであれば、そのような寛大な措置がとられることはまずあり得なかっただろう」と春樹は書く。父親が除隊しないまま第五十三師団の一員としてビルマ戦線に送られていたとしたら、死は免れ難かっただろうという。たしかに偶然の連鎖が人生というもので、九死に一生を得ることも偶然の結果ではある。しかし、何か「意味ある偶然」「物語的偶然」「神話的偶然」が起きた場合、それを「運がよかった」と我々は思う。心理臨床行為を続けていると、自然科学的視座からのリアル/現実では理解できないアクチュアル/実在感の活性化としての「意味ある偶然の発生」が必要となる。これをユングは「コンステレーション」と呼んだ。ビオンの「 α 要素/思考」も同様の意味ある概念であろう。「猫を捨てる—父親について語るとき—」の「父親」と息子春樹をつなぐ守りの要素を考察するに、 α 要素の発生源/ルーツの一つが「仏教」と「俳句」ではないかと思われるのだ。

前掲の「兵にして僧なり月に合掌す」について考えてみる。 α 機能は意味づけ機能でもある。赤ちゃんが不快を不快と認知できずに泣き喚いているのを受け容れて、「おむつが濡れて気持ちが悪いのね。替えてあげましょね。ほら気持ちが良くなったでしょ」と母親が世話する場面は、母親によっての意味づけ（ α 機能）がなされる場面である。赤ちゃんが泣き喚いて手足をばたつかせている相手は「気持ち悪さ」ではなく、「気持ち悪いヤツ」という敵（ β 要素）なのだ。母親のおむつ交換とやさしいことばがけは「気持ち悪いけど気持ち良くなるよね」との意味、つまり希望の素（ α 要素）を与える機能なのである。

戦場に送られた若者の心を支えるのは「意味」である。仏教と俳句は、「兵になったことの意味」を付与する α 機能を発揮し、アクチュアルな存在感をもたらしたのではないだろうか。そこに起きる偶然のなかに幸運は訪れやすいのではないだろうか。

「その呆然とした顔は、やがて感心した表情に変わり、そして最後にはいくらかほっとしたような顔になった」

父親の思い出は、父に α 要素を感じた瞬間である。村上春樹の幸運の要素もここに見ることができる。

第8章 偶然を待つ力

対談「村上春樹、河合隼雄に会いに行く」¹⁹⁾で心理療法家河合隼雄と村上春樹が次のように語り合っている。

河合「ぼくは何をしているかという、偶然待ちの商売をしているのです。みんな偶然を待つ力がないから、何か必然的な方法で治そうとして、全部失敗するのです。ぼくは治そうとなんかせずに、ただずっと偶然を待っているんです」

村上「でも、偶然を待つというのはつらいですよ」
河合「そりゃつらいですよ。なんにもしないんですから。待っていて、うまいこと偶然が起こったら、そのときにはやっぱりパツパツとがんばらなくてはいけないんですけれどもね」

ここまで読んで、「つらいか?」と自問してみた。ツーン少年の変化は3年待って到来した。「よかったなあ」と半ばあきれながら感心してしまった。信じていた偶然の到来に対する「あきれながらの感心」だった。「偶然待ちの商売人」であるカウンセラーは幸運という偶然をどこか信じている。幸運を味方にするコツは、先述の「 α 要素の熟成」と云えるかもしれない。

離人症少年との臨床経験から「 α 要素の熟成」の要素を抽出する。

第一の要素は、先述の「繰り返し」である。少年との場合、「毎週水曜日の午前9時から15分間の電話」のくりかえしである。繰り返していると、心が安定する。「また、おっばいは来る」と赤ん坊は繰り返される授乳の中で「希望」を持てるようになる。闇に慣れた目に新たな未来を見るのである。

第二の要素は、「話すために話す」ようになることである。心の熟成のためのコミュニケーションは「待つ・聞く・共に居る」である。「操作・説明」の無い会話、沈黙である。

ビオン(1970)は「負の能力(negative capability)」を精神分析家にすすめている。「事実と理由を短気に

求めることなく、不確かさ、謎、疑惑の中にいられる」能力だと述べている。²⁰⁾

ノーベル賞受賞作家サミュエル・ベケットの代表作「ゴドーを待ちながら」²¹⁾は「待つこと」「共に居ること」を具現化した戯曲である。舞台上の浮浪者二人はとりとめのない雑談を続ける。会話の意味は単純で誰にでもわかる。ただ、観客には「説明」が無い。ちょうど漫才師二人が延々と会話しているような芝居が続くのだ。二人は暇をつぶしている。観客は、暇つぶしを観続ける。二人がなぜここにいるのか。どこから来たのか。どこにも行かず何を待っているのか。など、場面設定や背景の「説明」が無いのだ。ちょうど、電車の中で二人の乗客が会話しているのを赤の他人が聞いているような。聞いているうちに、この二人が浮浪者で、お互いの名前を呼びあう仲で、誰かを待っている。それは「ゴドー」だということが、次第にわかってくるのだが、舞台の上で起こるべき「起承転結」の展開、筋立てがほとんど無い。私たちが期待し、芝居に当然起こるべきことがほとんど起きない。まさしく、「待つ・聞く・共に居る」だけの「操作・説明」の無い会話と沈黙が続き「結論・まとめ」も無く幕となる。不確かさ、謎、疑惑の中にいられる能力を私たち観客は求められる。

ベケットは若い時期にビオンの精神分析を2年以上にわたり受けた。故郷アイルランドの実家からロンドンに出てビオンの分析を受けている間は作家修行に打ち込むことができていたのに、アイルランドの実家にいる母親に呼び戻される時に限って身体症状が激しく出るのだった。このような1935年当時のビオンによるベケット母子の分離治療意図がわかる記述を伝記²²⁾に見ることができる。しかし、当然のことながらビオンの精神分析セッションの内容記述は無い。ただ、ビオンの分析、特にコミュニケーションはベケットの作品に大きな影響を与えたと思える。彼は「操作・説明」の無い、「待つ」だけの芝居を書き、役者にも意味、意図の説明をせずに演出した。ビオンから学んだことは「治そうとしない」で「治るのを待つ」ではないだろうか。その「待つ」ことは観客(患者)のヴァーチャリティ/潜在力を引き出し、アクチュアリティの活性化「本当の世界」を作り出すこと。演劇を観ている間、実存的な存在として自己実現の方向へ変化することではなかったか。

14歳の時に「ゴドーを待ちながら」に子役として出演。長じて役者、演出家となったヤン・ヨンソン²³⁾は「ゴドーを待ちながら」を刑務所で囚人達と台本を輪読する会を続け、役にぴったりの役者を選び、上演した。この難解な劇が囚人達にはストレートに受け容れられることを発見したのだ。「これは台本じゃねえ。俺の日記だ」「ウラジミールの言うこと、考えること、待っていること、笑ったり、泣いたりしていることは、ほとんど俺の人生と一緒だ」という囚人の言葉に励まされて輪読から上演に向けての活動が実現する。刑務所内での上演が大好評で、教育的効果が評価され、次に、スウェーデン国立劇場に招かれ、第一幕を上演。「観客は、俳優たちの言葉に敬意と注意をもって耳を傾けており、彼らに対する赦しの感覚が宙にただよっていた」とマスコミにも採り上げられる。評判を聞いた作者ベケットからの手紙を受け取り、面会する。「どうして第一幕しか上演しなかったのですか？」とベケットに尋ねられて「全幕を演じる権利を得る資金がなかったのだ」と答える。ベケットはテーブルのナプキンに「全幕上演許可」のサイン入り証明書を書いてくれて巡業することを促し、また報告に来るように言ってくれた。

ところが、喜び勇んで新たなツアーに出た初日、5人の役者のうち4人が脱走してしまった。ベケットはこの報告を聞いて「息をつめたあと、大笑いをして、穏やかに言った。『書いて以来、あの芝居に起こった最高の出来事だ!』」。

その後、カリフォルニア州サンクウェンティン刑務所から上演依頼があり、ベケットに報告する。「放免されるという望みのない人々が私の芝居に出会ったとき、何が起るか見てきてほしい」と励まされる。何が起きたか。刑務所で三年間緘黙状態の囚人がポッツォ役を志願したのだ。「頼みがあるんだ。ポッツォの役を俺にやらせて、自分を表現する手助けをしてくれないか？俺の人生を取り戻してくれないか？」

刑務所内の上演には囚人達の家族が最前列で観劇し、熱演に涙した。パリに戻りベケットに報告した時、「どうしてこのような大変な苦勞をあえてしたんだい？」と尋ねられて、「私はあなたの作品の沈黙を愛しているからです。あなたの顔の沈黙も愛しています」と答えると「君は私の戯曲の核心をつかんだようだな」とベケットは言ったとヤン・ヨンソンは書いている。

ヤン・ヨンソンが愛した「ベケットの沈黙」とは、説明のない「無」つまり、「無限の有」²⁴⁾なのだろう。ピオンから伝わった α 要素はベケットを癒し、ベケットは「ゴドーを待ちながら」を演じる人達に α 要素を与えたのだ。自分の中のアクチュアリティ「本当の世界」を放棄しようとしていた囚人達は、そのことに最も感応した。ベケットにはそれがわかったのだった。

「ゴドーを待ちながら」最後の場面²⁵⁾。

エストラゴン「ディディ」

ヴラジミール「うん」

「おれはこのままじゃとてもやっていけない」

「口ではみんなそう言うさ」

「別れることにしたら？そのほうがいいかもしれない」

「それより、あした首をつろう。(間)ゴドーが来れば別だが」

「もし来たら？」

「わたしたちは救われる」

沈黙が続く。二人は動かない。幕が降りる。

幕は芝居の幕だが、人生は死ぬまで続く。ゴドーを待ちながら続くのだ。終わることはむずかしい。沈黙の後、幕が引かれる。

村上春樹「猫を棄てる — 父親について語る時 —」は、子猫の昇天イメージで終わる。高い松の梢で子猫はどうなったか？「降りることは、上がることよりずっとむずかしい」「遙か下の、目の眩むような地上に向かって垂直に降りていくことのむずかしさについて思いを巡らす」。巻末の言葉である。

ありのままに、アクチュアルに描けば、生まれる前のこと、死後のこと、は無である。その無とは何か。リアリティで捉えようとすれば捉えられない。「無い」ことを分かるために α 思考、物語思考が有効であり、村上春樹は作品化する。心理臨床家は沈黙の見守りで「治る道」を用意し、「偶然待ち」するのである。(完)

文献等)

- 1) 村上春樹 (2020) 「猫を棄てる—父親について語る時—」文芸春秋社
- 2) 宮崎駿 (1988) 映画「となりのトトロ」スタジオジブリ

- 3) 宮崎駿 (2008) 「崖の上のポニョ」スタジオジブリ
- 4) 村上春樹 (2002) 「海辺のカフカ」新潮社
- 5) 松本邦裕 (2011) 「不在論」創元社 p.20-21.
- 6) 村上春樹 (1999) 「スプートニクの恋人」講談社
- 7) 村上春樹 (1997) 「アンダーグラウンド」講談社
- 8) 村上春樹 (2004) 「アフターダーク」
- 9) 村上春樹 (1994/1995) 「ねじまき鳥クロニクル」新潮社
- 10) 村上春樹 (1982) 「羊をめぐる冒険」講談社
- 11) 東山紘久・藪添隆一 (1992) 「システムティックアプローチによる学校カウンセリングの実際」創元社 p.91.
- 12) 芥川龍之介 (1971) 「羅生門」筑摩書房
- 13) 河合隼雄 (1997) 「子どもと悪」岩波書店 p.124.
- 14) ルドルフ・オットー (2010) 「聖なるもの」久松英二・訳 岩波書店
- 15) 松本邦裕 「不在論」(前掲書) p.46.
- 16) 木村敏 (1997) 「リアリティとアクチュアリティ」木村敏著作集7 弘文堂
- 17) 小林秀雄 (1942) 「当麻 (たえま)」小林秀雄全集14 新潮社
- 18) 村上春樹 (2019) 「ヤクルト・スワローズ詩集」文學界8月号 文藝春秋社
- 19) 村上春樹・河合隼雄 (1996) 「対談・村上春樹、河合隼雄に会いに行く」岩波書店
- 20) ハフシ・メッド (2003) 「ビオンへの道標」ナカニシヤ出版 p.123-124.
- 21) サミュエル・ベケット (2013) 「ゴドーを待ちながら」安藤信也・高橋康也・訳 白水社
- 22) デイアドロイ・ベア (2009) 「サミュエルベケット…ある伝記」五十嵐賢一・訳 書肆半日閑
- 23) ジェイムズ & エリザベス・ウイルソン (2008) 「サミュエル・ベケット証言録」所収「ヤン・ヨンソンの証言」 p.311-319. 田尻芳樹・川島健・訳 白水社
- 24) 東山紘久 (2020) 本書原稿に対するコメントより
- 25) サミュエル・ベケット 「ゴドーを待ちながら」(前掲書) p.194-196.

